

安心して営農できる

【園芸施設共済】

定年退職後にハウス2棟（9.7畝）でアスパラガスの栽培を始めた久保勤さんは、ハウスを設置した当初から園芸施設共済に加入している。「特に台風が怖い。風や雪でハウスが倒れたときのことを心配して加入した。『守り神』のようなもの」と話す。

久保さんは、風でビニールが破れる被害で、共済金の支払いをこれまで2回受けている。「ビニールはだんだん弱くなって行って、ちょうどその時に風で破れた。共済金をもらって助かった」と話す。被害が小さく支払いの対象にならない事故もあったというが、毎年欠かさず加入し、災害へ備えている。

久保さんのハウスの奥行きは86畝、94畝と長いため、3畝～4畝ほどの間隔で木の支柱を立てて補強する。「長いハウスは風や雪で壊れやすいと言われたが、作業効率を考え、譲り受けたままのサイズで建て直した。自分たちで作業したので経費も削減できた」。さらに、風通しを良くするために入り口を大きくしている。

本格的に農業を始めるとき、世羅町での生産が盛んで、単価の高いアスパラガスに着目。もともと水田だった土地に100トンの堆肥を入れ、一年かけて土作りに励んだ。

ハウス内の温度を15度～20度に保ち、3月末から春芽を、7月ごろから夏芽を、それぞれおよそ50日間収穫する。朝と晩の収穫が基本だが、一日10センチ成長する時期には昼にも収穫作業を行う。「もうすぐ78歳。妻と二人でやっているが、老化との闘いでもある」と笑顔で話す。

「農業は自然が相手だから、災害は避けて通れない」と、台風の接近前にはビニールを小まめに管理するなど対策も徹底。「NOSA Iの補償があるから安心して営農ができる。定年後、生きがいである農業を1年でも長く続けていきたい」と話す。



世羅町 久保 勤さん（77歳）